

2011・広大マスタースズ市民講座報告

「ヨーロッパの昔と今ー酒からみるー」

山代宏道

8月22日から9月12日まで、毎週月曜日13:30~15:00に、東広島市市民文化センター研修室において、東広島市教育委員会主催・広島大学マスタースズ共催の平成23年度市民講座を上記の共通テーマで計4回の講義として行いました。当初の計画では西条の「酒まつり」の前後に開催するつもりでしたが、会場の都合で時期が早くなり、ほろ酔い気分ならぬ、残暑の中での連続講義となりました。登録者は14名の市民で、毎回、そのうちの11・12名と2・3名のマスタースズ会員、生涯学習課の担当者が出席してくださいました。

共通テーマのもと、時代により酒が果たす効用はどう違うのか、哲学・歴史学・文学の分野から中世ヨーロッパの事例をてがかりに昔と今をくらべてみました。人と酒とのつきあいは古くて長いのですが、主役は人あるいは酒か。このキャッチフレーズは一般市民の関心を引きそうな苦心作だったのですが、なにしろ暑さのなかでの講義とあって、酒を主役としながらも、かなり各講師の専門研究分野に特化した、まじめな（「さめた」）内容になったかもしれません。じっくり味わっていただければ美味しさのわかる原料（講義内容）なので、これから時間が経って「熟成」してくれば、各人のなかで、すばらしい成果となるのではないかと期待している次第です。

各回の内容はつぎのようでした。

第1回 「フランス中世文学にみる酒」（原野 昇）では、フランス中世文学のさまざまな作品のなかで描かれている酒を、宴会の場面、酒場の場面、飲み比べの場面など、具体的にみていながら、酒がフランス中世文学のいろいろなジャンルの作品でとりあげられていることを明らかにしました。また、そのことを通して、酒がフランス中世社会のあらゆる階層の人々の飲食生活のなかでいかに重要な地位を占めていたかをみました。具体的には、倫理的観点からは快楽（放蕩）の象徴である酒を『クルトワ・ダラス』に出てくる酒場との関連で、また、ロマンに出てくる豪華さの象徴である宮廷における大宴会での酒、さらに、笑いの題材としての酒を『狐物語』の中の飲み比べによる泥酔場面でみました。後半では、現代フランス人の生活における酒について、ワインが料理をより美味しくし、料理がワインをより美味しくするというフランス料理とワインの密接な関係、そして、いろいろな行事の後のパーティーにおける食前酒や食後酒について考えてみました。

第2回 「酒の効用は変化するのか、なぜ？」（山代宏道）では、それぞれの時代で酒が果たした効用はちがっているのか、あるいは個人的に人はなぜ酒を飲むのか、主として中世ヨーロッパの場合を手がかりにして、現在と比較検討してみるつもりでした。しかし、実際には、古代から現代までのヨーロッパにおけるワインやビール、醸造酒、蒸留酒、混成酒の歴史を概観するこ

とになりました。当初、効用を、飲む人に限定して考えていたのですが、造る人にとっての効用もあるのではないかと考えるようになり、また、地域や時代背景と結びついて酒の造り方や飲み方が変化するので、時代的变化を見た方が効用の変化を理解できると思ったからです。中世の修道院が酒造りに果たした大きな役割が出席者に印象的だったようです。幻覚、食料の代わり、ストレス解消、活力源といった効用は飲む側にとっては今と変わりません。変わるとすれば、時代的、社会的な酒の位置づけが違うからだだと結論しました。

第3回 「酒と真理はどちらが強い」（水田英実）では、中世のパリ大学で毎年、復活祭と降誕祭になると会場即席の課題を募って行う公開討論を取り上げました。スコラ哲学の大御所として知られるトマス・アクィナスが主催した討論会の記録が残っていますが、1270年のクリスマス討論での課題は、真理は酒よりも国王よりもそして女よりも強いかというものでした。容易に收拾がつきそうにないこの討論をトマス教授がどう総括するのか、パリ大学の会場を埋め尽くした聴衆は興味津々であったわけですが、市民講座参加者も大いなる関心をもっていました。トマスは、4つは同一の部類に属さないから比較できないが、一致して比較が可能なのは、結果としての人間の心の変化であると考えます。身体の状態の変化で心を変化させる酒、感覚への働きかけで心を変化させる女、実践の領域で心を変化させる国王、思弁の領域で心を変化させるのが真理ですが、それらの力の間には序列があり、結論的には、最も高貴で優越するのは真理であると主張します。難問に対して、独自の観点を見出し、問題を整理し、議論の領域を明確にして、最終的結論に到達する。まさに、今日の大学ディベートのすばらしい試合を見ているようでした。

第4回 「ドイツ中世文学にみる酒」（岡崎忠弘）では、ドイツの英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』（1203年ごろ成立）を取り上げました。作品中で、のどの渴きをしずめる飲み物は、葡萄酒と蜜酒、それに泉の清水と戦死者の血であり、奇妙なことに、ビールは登場しません。主役は葡萄酒です。しかし、それも常時飲まれるわけではありません。葡萄酒は、上から賜る貴重な飲み物として捉えられ、就中、国王・女王が注がせる葡萄酒は、一触即発の事態を收拾したり、望まぬ謁見を打ち切ったりする、いわば「締め括る機能」を有しており、一度これを飲めば、「手打ち」同様、もう蒸し返さないという暗黙の了解が、当事者間にあったのではないのでしょうか。講義参加者に近づき、また、離れ、声を大きく、また、小さく、聴衆を引きつけて放さないそのプレゼンテーションは、中世ヨーロッパの吟遊詩人のパフォーマンスもかくや、と思った次第です。

市民講座のテーマやいかに。広大マスターズ会員の専門性がいかに発揮され、しかも、市民の関心をひきつけ、多くの参加者を期待できるのか。マスターズが協力した市民講座らしさとは何か。専門性と興味深さ、深い内容と幅広い参加人数、これらのバランスを取るのが難しい。こうした難問にはトマスはどう答えるのでしょうか。問題発見、整理、対策を見出すディベートが必要なのでしょうか。

